

# 3歳未満児における「気になる子」への 保育士の気づき・認識から支援への過程について —臨床心理士の訪問がある小規模園における 発達支援の検討—

山本幸子\*・村上太郎\*\*

**The process from the awareness and recognition of childcare workers to  
support children with special needs under 3 years old.  
—A study of support in Small-sized childcare centers with visits by clinical  
psychologists.—**

Yukiko YAMAMOTO\*・Taro MURAKAMI\*\*

## 1. 問題と目的

「保育者にとっては保育が難しいと考えられている子ども」が保育園には存在する。それらの子どもには「気になる子」という概念が用いられている。国立特別支援教育総合研究所<sup>1)</sup>によるアンケート調査の結果によると、気になる子に対して「担任によるきめ細やかな配慮」や「全職員で配慮する保育体制」での対応が90%以上、「担任以外の職員の配慮」が70%近くの保育園(所)で行われていた。これらのことを鑑みると、気になる子への配慮や支援は、どの園においても考えなければいけない課題であると言える。

支援の具体的な内容を自由記述によるアンケートで聞き取った研究<sup>2)</sup>からは、「個別の配慮を要する子どもに対しての保育園での支援」は、「声掛け」「席の配慮」「落ち着ける空間やもの」「視覚化」「環境設定」など、その子どもに合った個別の対応が行われていることが示された。

これらの個別対応はどのように行われているのだろうか。気になる子への保育士の気づきや支援に関する研究としては、質的な研究手法が多く取り入れられている。インクルーシブ保育の観点からエスノグラフィーの手法を用いて行われた調査では、保育室から飛び出した子どもに4人の保育士がそれぞれ声掛けをして子どもが納得し、集団保育へと自ら参加することを保育士たちが手助けをする様子が記述された<sup>3)</sup>。保育士の困り感に主眼を置いた研究<sup>4)</sup>からは、その子の発達に合った絵本を選んだり、視覚的な援助、言葉遊びをしたり、それぞれの子どもにあった対応をする様子や、ほかの保育士がそれに協力する姿が語られていた。

気になる子に関する質的研究は、その他にもグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて保育者の困り感の変容プロセスを記述した研究<sup>5)</sup>や、特別な支援の受容について保育園を組織

---

\* 山口学芸大学教育学部

\*\* 常葉大学保育学部

として分析したフィールドワーク研究<sup>6)</sup>が挙げられる。また、発達障害の診断を持つ子どもに対し就学支援として5歳児の親に、保育士が就学に向け保護者の意向を尊重しながら小学校と情報共有などを行う様子を示した研究も報告されている<sup>7), 8)</sup>。

これまで論じてきたように、保育園や幼稚園における気になる子への支援に関する質的研究は、主に以上児のケースにおいて数多く報告されてきている。一方で、未満児もしくは未満児クラスの保育者を対象とした調査はまだ多くはない。「気になる子」は1～3歳児での発見が多いことや、3歳での診断や受診の勧めが多いことが示されている<sup>9)</sup>。また、アンケートによる量的な研究でも、支援について未満児に区切って調べたものは見受けられなかったが、0～6歳のそれぞれの年齢で気になる原因について比較したものはあった。保育士が未満児に対して「気になる」原因は、以上児と異なっていた。久保山らのアンケート調査<sup>10)</sup>では未満児は、3 - 4歳児よりも「発音がはっきりしない」「視線が合わない」「言葉がおうむ返し」「自分の世界に入ってしまう」といった内容が多く、「コミュニケーション」の問題とまとめられている。また、津田らによる保育士へのアンケート調査<sup>11)</sup>で、対人的なトラブルは0歳児がほかの年齢に比べて少ないという発達上の特徴がみられる一方で、言語・発達の遅れが1歳児で他の年齢よりも多いということが示されていた。これらのことから、未満児での「気になる」要素は、他の年齢と発達上異なることが示唆される。

久保山ら<sup>12)</sup>と津田ら<sup>13)</sup>の調査が示しているように、未満児において保育士による子どもへの気づきがかきかけとなり、それぞれの子どもの支援が始まると考えられる。しかしながら、未満児における保育士の気づきのプロセスを詳細に検討した研究はまだ多いとは言えない。そのため本研究では、保育士の気づきの始まりの過程を質的に明らかにすることを目的とする。

未満児の保育形態の一つに未満児のみを対象とする定員19名以下の小規模保育園（以下、小規模園と表記）がある<sup>14)</sup>。藤沢らは保育環境評価スケール乳児版を用いて小規模園と中規模保育園との比較を行い、個人的な日常ケア（登園、食事、午睡、おむつ交換）や、言葉の理解を助けること、相互理解（しつけや保育士とのやり取りや、仲間同士のやり取りなど）などの項目で、小規模園の方の質が高いことを示している<sup>15)</sup>。また、大江の研究では、園の理念による違いがあるものの、家庭的保育の流れをくむ小規模園では「ゆったり」と「電車をずっと眺める」といった「少人数である故、臨機応変な対応で過ごす」ことが特徴として示されている<sup>16)</sup>。

これらの小規模園に関する調査結果をふまえると、小規模園では気になる子どもにも「ゆったり」とした個別対応が可能となることが考えられる。しかしながら、小規模園における「気になる」子どもへの気づきや支援の実践に関する調査研究はほとんどない。そこで本研究では、小規模園を調査対象とし、保育士が未満児に対する「気になる」過程についてと、個別対応や支援の様子について質的に検討する。本研究では、臨床心理士が定期訪問している園を調査対象とした。垂水ら<sup>17)</sup>のフィールドワーク研究では、心理の専門家が保育園に定期訪問し、専門的な助言をすることで、保育士の困難を軽減し、支援を「後押し」することが考察されている。小規模園で、臨床心理士の定期訪問を受ける、未満児にとってできるだけ「良い」保育環境において、保育士はどのような気づきと支援を行っているのかを検討し、早期からのより良い発達支援の可能性を探ることを目的とする。

## 2. 方法

### 1) 参加者

F県内の小規模保育園4園で、気になる子どもの担当をした経験のある保育士7名から調査協力を得た。年齢は平均35.6歳（25～46歳、SD = 8.07）。保育経験は平均12年（4～26年、SD = 7.83）であった。これらの園では2019年7月ごろから2～3か月に一度、臨床心理士による

巡回相談にて子どもの発達の様子に関する検討を行っている。小規模保育園に訪問をしている臨床心理士に、対象者となる保育士の選定を依頼した。参加者には事前に調査協力のための説明と同意を行い、調査当日にも倫理的配慮などを説明したうえで、書面にて同意を得た。

## 2) 手続き

対面もしくは、ZOOM を用いたオンラインでの1対1での半構造化面接を行った。当初はすべて対面での面談の予定であったが、調査時は新型コロナウイルス感染症の流行によって、対面での実施が難しい時期が続いていたため、オンラインでの面談も方法に加えた。面談の実施形態は参加者に選択してもらった。対面での面接は4名、オンラインでの面接は3名であった。

インタビュー時間は平均約42分(32～62分、 $SD = 9.81$ )であった。面談時期は2021年1月～10月であった。

面談は同意を得てから録音し、Ami Voice エンジンを使用したAI文字起こしで逐語録を作成し、調査者と研究協力者の二人が録音データを確認しながら逐語録の修正を行った。分析対象は、気になる子どもに対して「いつ」「どのような場面」で気になり始めたか、どのように対応したかについて対応する部分を分析した。

保育士の語りについて客観的な分析を行うために、逐語録はKH coder を使用し分析を行った。KH coder は、頻出の語彙を抽出し、多変量解析を行うツールである。分析者の主観を受けない形でデータ全体を要約できる利点がある<sup>18)</sup>。本研究では、それぞれの語がどの語と共に出現するかを可視化する共起ネットワーク分析を採用し、分析を進めた。

分析にあたって、感動詞(ええ、まあ)と副詞(あの、うん、あと)や特定の動詞(思う、考える)といった、参加者の口癖や今回の調査に関係しない語は、分析対象から除外した。また、臨床心理士を指す「K先生」「心理の先生」「臨床心理士さん」などは、全て「心理士」に統一した。また、気になる子「Aくん」「Bくん」などは、「気になる子(Aくん)」「気になる子(Bくん)」と変更し、臨床心理士と気になる子が、分析に抽出できるようにした。

## 3. 結果

それぞれの共起ネットワークの語群を分類し解析を行った。抽出された語は\_\_\_、具体的な語りは□で囲んだ。語が含まれる共起ネットワークのサブグラフの番号は<①>という形で示した。

気になる子どもに対して「いつ」「どのような場面」で気になり始めたか、どのように対応したかという質問に関する語りの文は264文、総抽出語は8291語であった。語の出現数5以上で、上位60の共起関係を対象とし分析し、modularityでのサブグラフを作成した共起ネットワークを示す(図1)。

語の結びつきのあるものが線をつないであり、サブグラフとしてグループ化し示している。グループ内での語の結びつきは実線、グループ間での結びつきは破線で示してある。語が書かれた円の大きさは語の出現数を示している。

共起ネットワークの結果から、3つに分けて分析を行う。1つが、サブグラフ①～⑥に対応する気になる行動とそれに対する支援。2つ目は、⑦⑧⑩に対応する保育士の気づきの過程。3つ目は、⑨⑪に対応する、園がチームとして支援をする様子である。

### 1) 気になる行動や特徴とそれに対する支援

サブグラフ①～⑥に気になり始めた理由と支援に対応する語りが含まれていた。気になり始めたきっかけとして次の7つのことが語られた。

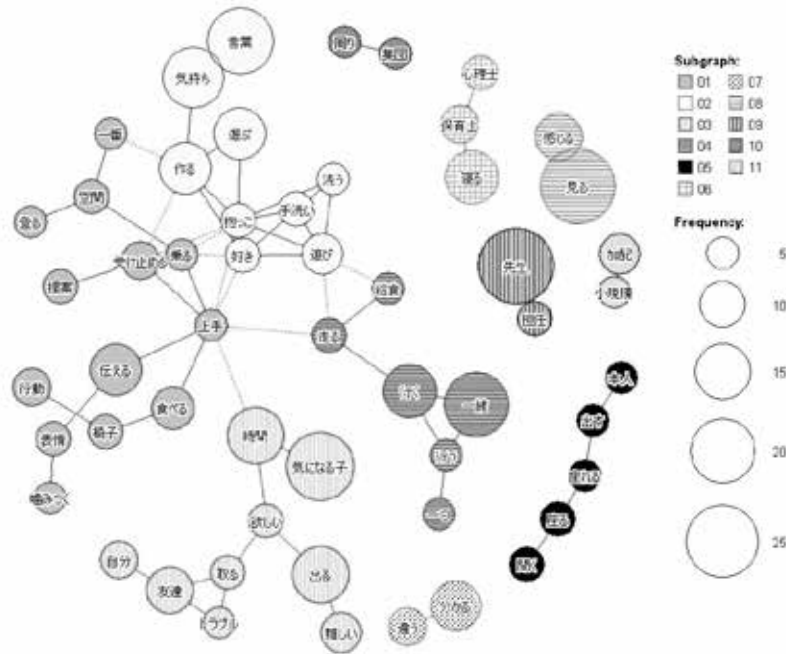


図 1. 質問 1 に対する共起ネットワーク

(1) 偏食 <①>

偏食の子が多いかたりはするので、やっぱり食べさせ方というか、どうやったら食べてくれるかなっていうのに対応で困ることはありました。

(2) 言葉の遅れ <②>

ほとんど言葉が出てなかったの、二歳過ぎて。

(3) 気持ちの切り替えの難しさ <②>

声をかけてもなかなか気持ちの切り替えがスムーズにいかないということが多かった

(4) 座れない・大声を出す <⑤>

みんなが座って話を聞いている時に、座れずに大きな声を出したり。話を聞いてない

(5) 昼寝の困難 <⑥>・大声を出す <⑤>

寝る時がやっぱりなかなか眠れなくて。大きな声出したり。あとは、寝そうになっても、少しのちっちゃい音でも、敏感に目を開けて。眠たいので泣き叫んだりとか。

(6) 友達との取り合いなどのトラブル <③>

衝動的な行動がちょっと多くて、友達とトラブルになりやすかったり。もちろんまだみんなも言葉が出ない時期ではあったので、おもちゃの取り合いだったりあったんですけど、かっとなってお友達のおもちゃを取ったり

(7) 噛みつく <①>

この年齢特有の噛みつきとか引っ掻きとかではない、なんというか私達はただの勘などところもあるんですけど、それではないんだろうなっていう、なんか衝動に駆られてやってる感じがあるかな

これらの結果をまとめると、まず「偏食」、「言語の遅れ」、「気持ちの切り替えの困難」、「睡眠の問題」という子どもの発達特性に関する点が挙げられた。さらに「座って話を聞く」、「お昼寝」という集団場面での問題。そして、「友達とのトラブル」「噛みつき」といったコミュニケーション上の問題行動も「気になる」と感じたきっかけとして挙げられた。

次に、サブグラフ①、②に保育士が個別に行う支援について語られていた。

(8) 言葉かけをする<②>

その活動のときにしてもらってるときっていうのは、見通しを立てて、その子に伝えて、次は何々するからみんなでいこうねとか、公園に行く前に言葉かけを常に、事前にするようにしてました。

(9) 簡単な短い文章で伝える<①>

手洗いに行きますとか、お椅子に座るよ、エプロンつけます、着替えしますみたいな感じで簡単な短い文章で伝えるようにしてました。

(10) 上手にできたねと受け止める<①>

上手に座れたときとかは上手に座れてるねっていうふうに思いっきり褒めるように、伝えるようにして、できないことより、出来たときに思い切り誉めて

(11) 抱っこする<②>

言葉かけをして、あんまり時間がかかりすぎるようだったら、遊びの切れ目を見つけて、手洗いに行こうって言って抱っこをして、手洗い場のところまで行きます。

(12) 好きなものを持たせる<②>

そばで座れるように、その子が好きなものを持たせて。それを持って座らせるのを、何度も繰り返して。それを離さないなら、だったら座る、みたいなパターン化していくことで、座れることが増えたので、同じことを何回も何回も繰り返して行きました。

(13) 空間を作る<①・②>

お昼寝のときとかも気になる子だけの空間を作って、落ち着ける空間を作って、お昼寝もそんなに寝ない子だったので。

支援については、それぞれの子どもの特性や問題に対して、集団保育に参加できるような細やかな援助について語られていた。また、昼寝についてはその子の落ち着く場所を作るといった個別に合わせた援助を行い、園で対象児が過ごしやすくなるような配慮がされていたことがうかがえた。

## 2) 保育士の気づきの過程

次に、サブグラフの⑦⑧⑩では保育士の気づきの過程について語られていた。

(1) ある種の違和感<⑦>

他の子と、ちょっと違う

(2) 独特な視線<⑧>

本当に意識がこうクローズしてるとかと閉じてる感じの時の、なんかどこ見てるのか分からない感じ

(3) 他の園児と比較した発達の遅れ<⑧>

4月当初は全員がそういう感じなんですけど、月日が流れてもそこがクリアできない

(4) 集団への適応過程が他の子どもと比べて見られていない<⑩>

他の園児（同じ2歳児クラスの園児）とちょっと差が開いてきたかなっていうのとか、なかなか集団の流れについて行けないなっていうところが見られたのが、最初のきっかけの場面です

これらの語りから、保育士はある種の違和感を、独特な視線などの特徴や発達の遅れから感じていたことがうかがえる。そして、2歳で集団として動くことが増えることで集団への適応過程が他の子どもと比べなかなか見られないことから「気になる子」として意識されていくという過程が示された。

### 3) 園がチームとして支援をする様子

次に個別の援助を行うための園や保育士チームとしての対応がサブグラフの⑨⑩で語られた。

#### (1) 臨床心理士やほかの保育士と一緒に対応を考える<⑨>

すぐに心理士の先生に相談して、一緒にちょっとこう対応っていうのを考えてもらっていました。同じようにそういう子の保育をしたことがある保育士の先生だったり、保育歴の長い先輩、あと去年担任された先生とかに、あの一つ一つアドバイスをもらいながらいろいろと、その一つ一つ何か私が困ることがあったら先生たちが一緒に考えてくださって

#### (2) 縦割りで活動し、気になる子に付ける先生を作る<⑨>

0と1(歳児クラス)と一緒に活動して3人目の先生を作るとか

#### (3) 小規模だから見やすい<⑩>

小規模だからこそ、気になる子の性格がよく見えるのか、これが大規模だと、やっぱり2、30人いての1人だから、見えにくいのかなとは思うんですけど、小規模で、全体合わせてもやっぱり20弱だから見やすいのか。(大規模園の人数だと)やっぱり、制止ができない。一番は。

臨床心理士やほかの保育士と話し合い、アドバイスをもらう中で、他の保育士との支援内容や価値観のすり合わせが丁寧に行われている様子が語られていた。また、他の保育士との連携により、縦割り保育を行うことで加配的に動くことができる人員を作る様子が語られており、子どもの様子に合わせた援助を行うための体制づくりが行われていることが示された。加えて、これらの援助は、19人以下の定員である小規模園であるからこそ、子ども全員の把握が容易となること、そして気になる子の特徴も見えやすくなることが語られていた。また、大規模園では人数的に、気が付いたとしても個別の子どもの制止などの対応ができないが、小規模ならできるということも語られていた。

## 4. 考察

今回の結果から、小規模保育園で保育士が子どもの発達に対する違和感から、個別に支援をしている現状が質的に明らかになった。

### 1) 保育士の気づきの始まりの過程

保育士は未満児の発達の遅れや、独特な視線といった特徴から「他の子と、ちょっと違う」といった違和感を覚えることが気づきの始まりとして語られた。その後集団での行動が出始める2歳で、「集団への流れについていけない」ことによって、「気になる子」として認識されていることが明らかになった。

「いつ」「どのような場面で」気になり始めたかについては、言語の遅れや視線といったコミュニケーションの問題というアンケートによる先行研究<sup>19)</sup>、<sup>20)</sup>とも一致していた。

気づきの始まりは、言語の遅れといった発達の遅れだけでなく、偏食、独特の視線といったその子どもの行動が「気になる」きっかけとなっていた。これらの特徴的な行動を意識することは、臨床心理士の定期訪問で専門的助言を受ける中で障害への理解が進み、保育士の発達支援の専門性の向上が起こっていたからであろう。

### 2) 保育士による支援

気になる子どもたちに対する園や保育士の支援として、分かりやすい声掛けや、できたときに褒めて伝えることや、時間がないときは抱っこで連れて行き、座れないときは好きなものを持たせて参加させるといった、集団への参加を促すための細やかな個別対応が行われていた。

以上児の質的な研究では、子どもに合わせて集団保育を変えていくことが取り上げられてい

る<sup>21)、22)</sup>。しかし、今回の未満児への調査ではむしろ集団への参加を促すための個別支援について主に語られていた。これは、以上児は行事など高度な集団行動を求められるために参加を促すためのサポートが難しく、「気になる子」の参加には保育を変えるという方向性の援助が有効であると考えられる。

一方、3歳未満児はこれから集団での行動が獲得されるという段階であり、タイミングやポイントをしぼったサポートで「気になる子」も参加が可能であるということから、集団を構成する子どもの年齢によってサポートの方法が変わりうることが示唆される。また、今回対象にした園の一部では子ども主体の保育を志向しているという特徴もあり、子どもに合わせる保育をすることがあらかじめ根付いていたことも考えられる。そのため、子どもに合わせた保育は敢えて取り上げられることもなく自然に行われていた可能性もあり、語りとしては集団へ参加を促す保育について言及されたのかもしれない。

また、木曾による保育士の困り感に焦点を当てた大規模園での質的な研究<sup>23)</sup>では、保育士の困り感の軽減には、研修など外からのヒントを取り込み、ほかの保育士との価値観のすり合わせが行われ、それによって子どもに保育を合わせていくという流れが示されていた。今回の研究では臨床心理士の定期訪問が行われていた園を対象にしたことから、ヒントを外から取り込むというより、ヒントを専門家と一緒に園内で考え続けることが可能な環境だったといえる。今回の対象の園の臨床心理士の定期訪問の様子を確認すると、臨床心理士からの申し送りの際に、担任だけでなく他のクラスの担任など複数の保育士で話を聞き、また園全体にその知見が共有されていた。保育士との価値観のすり合わせの段階というより、すでに価値観の共有が進められる仕組みが整った段階であったといえるだろう。今回の研究結果からは担任が対応を抱え込むことによる困り感は、大規模園を対象とした先行研究に比べて少ないと言えるだろう。

保育園をチームとみて、それに対する臨床心理士の巡回の影響について調べた熊上らの研究<sup>24)</sup>によると、臨床心理士の巡回によって保育園全体の活動に影響があり援助活動をチームとしてエンパワーメントし、園内支援体制強化が期待されることが言われている。今回の研究では、個別の支援を行うために臨床心理士や他の保育士と一緒に対応を考え、部分的に縦割り保育を行うなどの柔軟な支援体制づくりが行われていたことが示されていた。既にチームとして園内支援体制強化が進んだ段階であったかもしれない。

### 3) 早期からのより良い発達支援の可能性

今回の研究によって、臨床心理士が巡回訪問をしている小規模園で、発達の遅れや独特な視線などの子どもの特徴から、保育士が「ほかの子と違う」という違和感を覚え、その後、その子が集団の流れについていけないことによって「気になる子」として認識がされることが示された。このような気づきの過程の中で、保育士は障害、診断の有無にかかわらず、園児が皆保育に参加することを志向し、必要な児には個別の支援をしている現状が明らかになった。

このような細やかな気づきと個別支援を可能にしている要因として、19人定員という小規模園の集団のサイズが挙げられる。集団の規模が小さいことから、小規模園では大規模園に比べ、担任保育士が担当する子どもの状況を把握することが容易である。それに加えて担任以外の保育士にとっても子どもたち全員の状況を把握することが容易な人数である。園内の保育士同士の行き届いた情報共有によって、必要な時に個別対応する人員を作ることもスムーズにでき、チームとして気になる子に対応ができていた。また、語りには出なかったが小規模園の人員配置が大規模園に比べて保育士配置の最低基準が一人多くなっているという人員の余裕も大規模園に比べて細やかな配慮を可能にしているかもしれない。

また、臨床心理士の定期訪問による専門的助言と、その中で起こる価値観のすり合わせによる

園内支援体制強化の効果<sup>25)、26)</sup>も支援の背景として考えられた。

小規模園だからこそ、早期からの子どもの個性の把握と集団保育に参加するための細やかな個別対応が、臨床心理士訪問による担任保育士の専門性の強化と、園内のチームワークの強化によってさらに支えられていることが示唆された。これらは、子どもにとって良いだけでなく、保育士の困り感が軽減される継続可能な支援が行われているといえる。臨床心理士のサポートを受けた小規模園の細やかな保育は、さまざまな気になる子へのよりよい発達支援のモデルになるといえるだろう。

今後の課題としては、小規模園特有の課題が挙げられる。小規模園は、2歳児で次の園への転園があるという特徴から、次の園への引継ぎが重要な課題である。大規模園と比べると、限られた時間の中で未満児での保育士の気づきを保護者や次の園につなげていくことが求められる。専門的な支援が必要となっていく可能性の高い子どもの保護者に発達についての保育士の気づきを共有すること、そこから児と保護者の最善の早期支援にどのようにつないでいけるかについて、今後も詳細に検討する必要がある。

## 引用文献

- (1) 笹森洋樹・後上鐵夫・久保山茂樹・小林倫代・廣瀬由美子・澤田真弓・藤井茂樹(2010) 発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 37, 3-15.
- (2) 若松昭彦・田坂泰子(2018) 保育所(園)における「気になる子」に対する支援の研究: 個別の(教育)支援計画を中心としたハンドブック作成の試み. 広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要, 16, 9-17.
- (3) 垂見直樹(2019) インクルーシブ保育のエスノグラフィー—発達障害児への異別処遇の過程—. 保育学研究, 57, 76-86.
- (4) 木曾陽子(2012) 特別な支援が必要な子どもの保育における保育士の困り感の変容プロセス. 保育学研究 50, 116-128.
- (5) 木曾陽子(2011) 「気になる子ども」の保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス—保育士の語りの質的分析より—. 保育学研究, 49, 200-211.
- (6) 垂見直樹・橋本翼(2017) 「特別な支援」の受容に伴う保育現場の組織変容の萌芽—私立保育所のフィールドワークから—. 保育学研究, 55, 43-54.
- (7) 亀崎美沙子(2017) 保育相談支援における保育士の葛藤—「気になる子ども」の保護者との関係変容に伴う支援の質的転換に着目して—. 十文字学園女子大学紀要, 47, 37-48.
- (8) 田宮縁・大塚玲(2005) 軽度発達障害児の就学にむけての保護者への支援—S 大学教育学部附属幼稚園の実践を通して—. 保育学研究, 43, 223-232.
- (9) 木曾陽子(2014) 保育における発達障害の傾向がある子どもとその保護者への支援の実態. 社会問題研究, 63, 69-82.
- (10) 久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳(2009) 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 36, 55-76.
- (11) 津田朗子・木村留美子(2014) 保育所における発達障害の早期発見・早期介入を阻害する要因の検討: 「気になる子ども」に対する保育士の認識と支援体制から. 金沢大学つま保健学会誌, 38, 25-33.
- (12) 前掲(10)
- (13) 前掲(11)
- (14) 新川朋子(2016) 小規模保育事業の変遷と課題: 子ども・子育て支援新制度との関連から. 大阪千代田短期大学紀要, 45, 25-34.
- (15) 藤澤啓子・中室牧子(2017) 保育の「質」は子どもの発達に影響するのか—小規模保育園と中規模保育園の比較から. *RIETI ディスカッションペーパーシリーズ*.
- (16) 大江由香(2022) 家庭的保育から小規模保育への変遷と動向. 大阪総合保育大学紀要, 16, 89-106.



- (17) 前掲 (6)
- (18) 樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版. 17-29.
- (19) 前掲 (10)
- (20) 前掲 (11)
- (21) 前掲 (3)
- (22) 前掲 (5)
- (23) 前掲 (5)
- (24) 熊上藤子・石隈利紀 (2016) 「気になる子」に関する巡回相談が保育士の行動および保育所のチーム援助に与える影響. コミュニティ心理学研究, 20, 28-44.
- (25) 前掲 (6)
- (26) 前掲 (24)